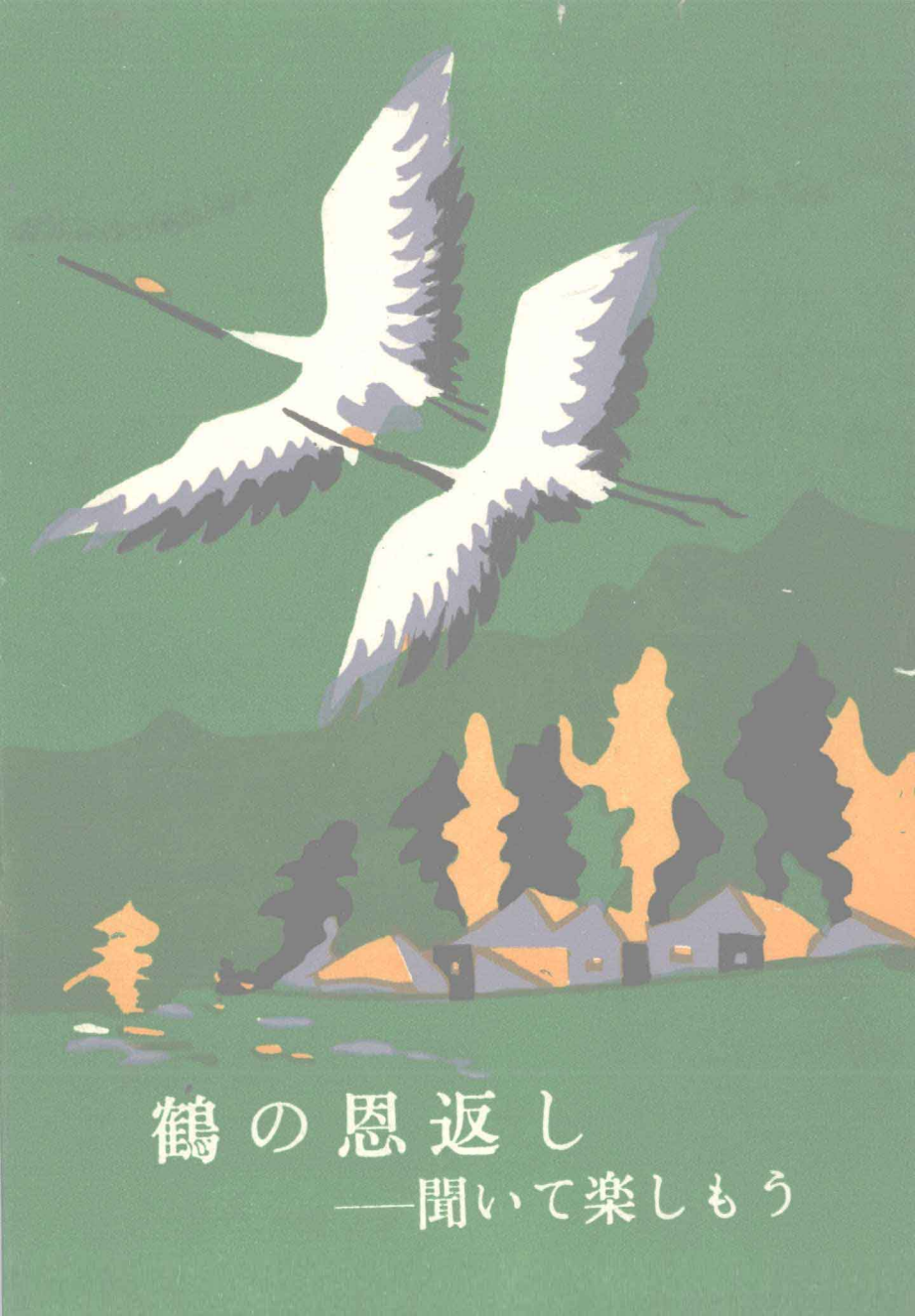

鶴の恩返し

——聞いて楽しもう

鶴の恩返し

——聞いて楽しもう

目　次

1．くじらぐも …… 1
2．風と子どもたち …… 2
3．シンドバッドの冒険 …… 6
4．サルとお地蔵さま …… 8
5．カモとりごんべえさん …… 11
6．宇宙への空想 …… 15
7．ある日のできごと …… 16
8．たけのこ淵の大きなかに …… 18
9．鑑賞　北斎とゴッホ …… 21
10．地底探険 MX 7 号 …… 24
11．ツルの恩返し …… 26

くじらぐも

出演：瀬戸口百合子

「おーい，おーい」
どこからか，だれかのよぶ声がします。
「おーい，おーい」
ぼくだよ，ぼく，くじらだよ，くじら。海のくじらじゃなく空のくじらさ。
そう，くじら雲さ。体は大きくて白くてふわふわ，しっぽもあるし，何でもよく見える目だってあるよ。
でも，なんといったって，ぼくの自慢はこの広い背中さ。みんなを乗せるためにあるんだよ。
だから，ぼくはこんなに大きいのさ。
ぼくは，ふんわりふんわり空の旅を続けているくじら雲さ。
どこへでも行けるんだよ。
きのうはたくさんの子どもたちと，遠い遠い虹の国まで，行ったんだよ。
雨あがりの青い空，七色の虹の川が，ぴかぴか光って流れていたよ。
その前は，南の海，青い青い空。大きな魚，小さな魚，いろいろいた

よ。
町でも村でも，海でも出でも，どんなところへでも行けるんだよ。
きみたちは，どんなところへ行きたいのかな。
どこへでも連れてってあげるよ。さあ，決まったら出発だ。

風と子どもたち

作：西本鶏介　出演：石山かつみ

ずんと，むかしの話です。
ある秋の日，村の子どもたちが，お堂のまわりで遊んでおりました。
そこへ，知らない男がやってきて，
「お前たち，こんなところで遊んでいても，なんにも食うものがあるまい。カキやナシのいっぱいあるところへいきたくないかい」
　といいました。
「ほんとかい。それなら，おれもいく」
　ひとりの男の子がいうと，まわりの子どもたちがみんな，
「おれもいく，おれもいく」
といいました。
「よしよし，みんな連れていってやろう」
　そういって男は，おしりから，しっぽみたいなものを出し，ずうー

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

んと長くのばしました。

「さあ，みんな，これにまたがって，しっかりつかまっとれよ。いいか。いくぞ」

男は，口の中で，なにやら，むにゃむにゃじゅ文を唱えました。すると，ごーっと風が起こって天に舞いあがりました。

子どもたちを，しっぽに乗せた男は，ぐんぐん空を飛んでいきます。畑もお堂の屋根も，だんだん小さくなっていきます。

「わあわあ，きゃあきゃあ」

子どもたちが夢中でしっぽにつかまっているうちに，男は，ある山の中に降りました。

見ると，ナシやクリの木が何本もはえていて，どの枝にも，おいしそうな実がいっぱいです。子どもたちが，びっくりしていると，男は，

「さあ，食べろ，食べろ」

と，また風を吹かせて，ナシやカキの実をばたばた落としてくれました。

男も，おもしろがって，子どもたちといっしょにナシやカキを拾って食べました。

そのうちに，だんだん日が暮れてきて，あたりがすっかり暗くなりました。

すると，男は急にあわてだし，

「しもうた，しもうた。おれはこれから，大急ぎでほかのところへいかねばならん。すまんが，お前たちだけで帰ってくれ」

というなり，ごーっと風を吹かせて空へ舞いあがっていきました。

あとに，残された子どもたちは，どうやって家に帰ったらいいのか

わかりません。
「おうちへ帰りたいよう」
ひとりが泣きだすと，みんないっしょになって，
「おうちに帰りたいよう」
と泣きました。
その時，向こうのほうに，ぽっちり明かりが見えました。
「だれか迎えにきたかもしれないよ」
子どもたちは泣きやみ，しっかり手をつないで明かりのほうへ歩いていきました。
しばらくいくと，大きな一軒家がありました。そおっと，中をのぞくと，おばあさんがひとりで坐っておりました。
「だれじゃ，そこにいるのは」
子どもたちは，びっくりして顔を見合わせました。
「かまわないから，はいってこう」
おばあさんにいわれて，子どもたちはおずおずと，家の中へはいりました。
「お前たち，どっからきた」
「おらたち，男の人に，なにやら長いものに乗せられて連れてこられただ。そんで，ナシやカキをうんと食わしてもらって……そしたら，男の人，きゅうにいなくなってしもうて」
そこまでいうと，子どもたちはまた，えんえん泣きだしました。
「よし，わかった，わかった。心配せんでもええ，すぐ送ってやっから，まんず，ままを食え」
そういって，おばあさんは，子どもたちに，まっ白いごはんと，熱

いいも汁をごちそうしてくれました。

それから，隣りの部屋へいって，

「これ兄さ，起きろ，起きろ」

といいました。

「うんにゃ，かあさまどうした」

眠そうな顔をした男が部屋からでてきました。

「南風のやつ，ほんに気まぐれもので，しょうのねえやつだ。この子らを連れてきて，おいてけぼりをくわせやがった。お前すまねえが，この子らを送ってやってくれ」

「ああ，いいとも」

男は，さっきの男のように，しっぽみたいなものをだし，ずうーんとのばしました。

「さあ，早く乗れ。弟のかわりにおらが送ってやる」

子どもたちは大よろこびで，しっぽにつかまりました。やがて，なにやらじゅ文を唱えると，北風はごーっと，空へ舞いあがりました。

さて，村では，夜になっても子どもたちが帰ってこないので，大さわぎ。

そこへ，天から急に風が吹いて，子どもたちが次々飛んできました。

村の大人たちは，すっかりよろこんで，北風に向かって，手を合わせましたとさ。

シンドバッドの冒険

出演：石山かつみ

長い長い船の旅を続けていたシンドバッドは，あるとき，それはそれは美しい島に着きました。色とりどりの大きな花，小さいかわいらしい花，おもしろい形をした花が，たくさん咲いて，あたりはとてもいいにおいでいっぱいでした。

一面の花の中にうずまるようにして休んでいたシンドバッドは，とてもよい気持になり，旅の疲れも出てぐっすり眠ってしまいました。

どのくらい眠ったでしょうか。ふと目がさめて気がついてみると，周りにはだれひとりおりません。

「あっ，しまった。ひとりぼっちになってしまった。どうしよう。困ったなあ。」

シンドバッドは，ぼんやり立ちあがると，あてもなくあちらへ行き，こちらへもどりして，島のあちらこちらを歩きましたが，だれにもあうことができません。無人島だったのです。

しかたがないので，目あてもなく歩いていると，白くて丸い，山のようなものを見つけました。おそるおそるさわってみると，白い，つ

るつるした壁のようです。両手でさわりながらひとまわりしてしまいました。この教室よりも大きいぐらいでした。

「へんな家だなあ。入り口もないし，窓もないし，それに屋根もないぞ」と，その時，急にあたりが暗くなりました。

「あっ。どうしたんだろう。まだ，日が暮れるのにははやすぎるのに。」

驚いて空を見上げたシンドバッドは，びっくりしてしりもちをついてしまいました。

それはそれは大きな鳥が，こちらへ向かって飛んでくるではありませんか。あまり大きな鳥なので，広げた翼にお日さまがかくされてあたりが暗くなったのです。

「あれはいつかきいたことのあるロックという鳥にちがいない。あぶないぞ。はやくかくれなくちゃ。」

シンドバッドは，白い不思議な家のかげに，できるだけ小さくなってかくれ，息をころして目をはなさず見つめていました。

ロックという鳥は，象をつかまえてひな鳥のえさに持って帰るといわれるほどの大きな鳥なのです。

ロックは，たちまち近づいたかと思うと，白い家のすぐそばにふわっと舞いおりました。その時の風でシンドバッドはあやうく飛ばされそうになりました。気持を落ちつけてよく見ると，つぼめた翼の色は，光り輝くばかりの美しさでした。

「あっ，この白い家みたいなものは，ロックの卵にちがいない。ようし，このロックにつかまって，どこかへ連れていってもらおう。」

シンドバッドはロックが眠るのを待って，自分の体を柱のようなロックの足にしっかりとひもでしばりつけました。

あくる朝，ロックはサイレンのような大きな声をあげて空高く舞い上がりました。シンドバッドはロックの足のつめにしばりつけられたまま，ロックといっしょに空を飛びました。あんまり早いので息がつまりそうです。目もくらみそうです。

そっと目を開いてみると，あの美しい島は見えなくなり，子どもたちが楽しそうに遊んでいる遊園地やにぎやかな町が，豆つぶのように見えては後ろに消えて行きました。

ロックは，しばらく空を飛んでいましたが，急にぐんぐんおりはじめました。シンドバッドは気を失いそうになりました。ロックの足が地面につくと，シンドバッドは体をしばっていたひもを急いでといて，ロックの足のつめから離れました。そして，ロックに気づかれないように急いでかけ出しました。

サルとお地蔵さま

作：西本鶏介　出演：瀬戸口百合子

むかし，むかし，あるところに，おじいさんがおりました。ある日，山へしば刈りにいくと，たくさんのサルが，石のお地蔵さまをかついで川をわたっていました。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

「こいつはおもしろいぞ」

そこで，おじいさんは，お地蔵さまのまねをして，川のそばに立ちました。サルが集まってきて，

「あ，ここにもお地蔵さまがござる。お堂に運んで，お祭りしなくちゃばちがあたるぞ。もったいない，もったいない」

といいながら，みんなで肩車を組み，その上におじいさんを乗せました。

「おサルのおしりはぬらしても，お地蔵さまのおしりはぬらすなよ」

おもしろそうにうたいながら，ざぶざぶ川の中へはいっていきます。

おじいさんは，おかしいやら，くすぐったいやら，笑いそうになるのを，じっとがまんしていました。だってお地蔵さんが笑うなんてことはありませんからね。

向こう岸につくと，一つのお堂がありました。

サルたちは，おじいさんをそこまでかついでいき，きちんとお堂の中に立てました。それから，おじいさんの前に，いっぱいお供え物をして，どこかへいってしまいました。

おじいさんが，そうっと目をあけると，どうでしょう。お餅やくだものやら宝物がいっぱい。おじいさんは，大よろこびで，それを持って家に帰りました。

家に帰って，おばあさんとふたりで宝物をながめていると，隣りの欲ばりじいさんがやってきました。

「わあ，こりゃたまげた。おじいさんはいつお金持になったのかい」

そこで，親切なおじいさんは，きょうのことをくわしく話してやり

ました。

「そいつはおもしろい。そんならわしも，お地蔵さまになってみよう」

あくる日，欲ばりじいさんは，さっそく山へいきました。おじいさんにおそわったとおり，川のそばでお地蔵さまのまねをして立っていました。

すると，まもなく，サルがやってきました。

「あ，ここにもお地蔵さまがござる。お堂に運んで，お祭りをしなくちゃばちがあたるぞ。もったいない，もったいない」

そういって，みんなで肩車を組み，その上に，欲ばりじいさんを乗せました。

「おサルのおしりはぬらしても，お地蔵さまのおしりはぬらすなよ」

声をそろえて，うたいながら，ざぶざぶ川の中へはいっていきます。おじいさんは，おかしいやら，くすぐったいやら，もうがまんができなくなりました。

川のまん中まできた時，とうとう，

「あっははは……」

と笑ってしまいました。すると，サルたちはびっくりして，おじいさんの顔をのぞきこみました。

「ありゃ，こいつはお地蔵さまじゃないぞ。なんだ，人間じゃないか」

いうなり，欲ばりじいさんを，川の中へ，どぶーんと投げこんでしまいました。おじいさんは，ずぶぬれになって，やっと岸へはいあがりましたが，もう少しでおぼれ死ぬところでしたとさ。

カモとりごんべえさん

作：西本鶏介　出演：石山かつみ

むかし，あるところに，ごんべえさんというカモとりの名人がいました。まい日，近くの池へいってカモをとり，それを売って暮らしておりました。

ところが，ある時，ごんべえさんは，

「まい日一羽じゃつまらない。一度に百羽もとってやろう」

と，考えました。そこでごんべえさんは，池のまわりに，カモとりのワナを，一度に百もしかけました。

「さて，うまくいったかな」

次の日の朝早く，ごんべえさんは池にやってきました。すると，どうでしょう。

いるわいるわ。どのワナにもカモがかかって，羽をばたばたさせています。かぞえてみると九十九羽。

「しめしめ。あと一羽だ。さあ，早くかかってくれ」

ごんべえさんは，ワナのつないだ太い綱をにぎって，いまかいまかと待っておりました。

そのうちに，東の空からお日さまが顔をだし，池の氷がきらきらと光りました。

すると，ワナにかかっていたカモたちがまぶしくなって，一度にばたばたと飛びあがりました。

「わあ，たいへんだ」

ごんべえさんは，あわてて綱をひっぱりました。でも，カモは九十九羽。ごんべえさんはひとり。ずるずるひっぱられ，とうとうカモといっしょに，空高く引きあげられてしまいました。

ごんべえさんをぶらさげたカモたちは山を越え，森を越え，どんどん飛んでいきます。そのうちに，ごんべえさんのぶらさがっていた綱がぷつんと切れました。

ごんべえさんは，糸の切れたタコのようにくるくるまわりながら落ちていきます。

「どっしん」

大きな地ひびきをたてて，ごんべえさんは畑の上に落ちました。

「うえっ，天から人が降ってきた」

畑で働いていたお百姓さんたちがびっくりして集まってきました。

ごんべえさんは，おしりをさすりながら，畑に落ちたわけを話しました。

すると親切なお百姓さんが，

「それはそれはかわいそうに。こんなに遠くにきちゃ家にも帰れまい。ここで働きなされ」

と，いって，ごんべえさんを自分の家に連れていってくれました。

次の日から，ごんべえさんはお百姓さんの手伝いをして，草を刈っ

たり，土を耕したりしておりました。

ところが，ある日，ごんべえさんが鎌でアワ刈りをしていると，一本だけ特別大きなアワがありました。どっしりと実をつけ，いまにも折れそうに曲がっています。

ごんべえさんが，そのアワの穂先を鎌でばっさり切りました。すると弓のように曲がっていたアワの茎がぴんとはね，ごんべえさんを空高くはねあげました。

そこへ強い風が吹き，ごんべえさんは，あっという間に山の向こうへ飛ばされてしまいました。

さて，ごんべえさんの落ちたところは，町の大通り。たちまち見物人が集まってきました。

「大きな鳥が天から落ちてきたそうじゃ」

「いや，カミナリさまかもしれないぞ」

みんながわいわいさわぐので，ごんべえさんははずかしくてたまりません。あわてて近くのかさ屋さんへ逃げこみました。

変な男が飛びこんできたので，かさ屋さんは驚きましたが，ごんべえさんの話を聞いて，かわいそうになりました。

「自分の家がわかるまで，ここにいるといい」

ごんべえさんは，次の日からかさ屋さんで働くことになりました。

ところが，ある日，ごんべえさんがかさをほしていると強い風が吹いてきて，かさといっしょに，またまた空へ飛ばされてしまったのです。ごんべえさんは，かさの柄にしっかりとつかまり，風車のようにくるくるまわりながら空を飛んでいきました。

そのうちに，風がやんで，なにか固いものの上に，すっと足が着き

ました。

「やれやれ，助かった」

ごんべえさんが，ほっとして下を見ると，

「うえっ」

たちまち青くなりました。なんとごんべえさんは，お寺の五重の塔のてっぺんに立っておりました。

「た，助けてくれえ！」

ごんべえさんは，塔の屋根にしがみついて叫びました。叫び声をきいて，おおぜいの人が塔の下にやってきました。でも，だれも助けることができません。

そのうちに，ごんべえさんは，くらくらっと目がまわって，思わず足がすべりました。

「がらがら，どっすん」

ごんべえさんが見物人の頭の上に落ちました。そのひょうしに，見物人たちは，一度におでこをごっつんこ。だれの目からも，すごい火花が散りました。その火がぱっとお堂に燃えうつって，みるみるうちに，お寺も五重の塔も大火事になってしまいましたとさ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com